第Ⅳ部門　　陶磁器産業地域におけるまちづくりの取組みについて

-愛知県瀬戸市洞地区を対象として-

近畿大学大学院研究生　正会員　○玉井　明子
近畿大学理工学部　正会員　久　隆浩

1. はじめに

1300 年の窯業の歴史と伝統を持つ“せとものの町”瀬戸市は、中世から時代の変化にもまれながらも窯の火を絶やすことなく発展してきた。1989 年瀬戸市活性化ﾋﾞｼﾞｮﾝの策定を契機に地場産業振興を目的とした環境整備や施設づくりが積極的に行われ、なかでも伝統的窯業産地である洞地区では、町並みを保全・活用する目的で 1991 年頃から地元有志による内発的まちづくりが実践されている。本稿では、この洞地区を対象としてここ 10 年間に実施されてきたﾊｰﾄﾞ整備に焦点をあて、どのような経緯で整備されてきたのか、整備後どのような影響を町に及ぼしてきたのか、について現地視察調査・ﾋｱﾘﾝｸﾞ調査・文献調査を通してﾋﾄ・ｼｶｹ・ﾓﾉ・ｺﾄの観点から事象を分析・整理し、洞地区のまちづくりの特徴や効果を明らかにすることを目的とした。

2. 洞地区の概要とまちづくりへの契機

瀬戸市の東部丘陵地に位置する洞地区（仲・東洞町）は人口 332 人、129 世帯（H10 年）、現在は 本業窯元が唯一残存している状態であるが、かつては日本ﾀｲﾙの源流である洋風建築・和洋折衷建築用ﾀｲﾙ(本業ﾀｲﾙ)の製造や民芸食器(馬の目皿)の生産で賑わっていた。この本業製品を荷車や天秤棒を担ぎ往来したという幅員 1m 程の小道には、窯道具を自在に組み合わせてつくった塀や垣根があちこちで見られるなど、窯業を生業としていた幕末からの慣習が住環境の中に形として顕れている [1]。この様な風情ある地場の環境をﾏｽｺﾐが取り上げると同時にこの地を訪ずれる人も増加、道路とも民家の庭先とも判別がつき難いこの小道を訪問者の誘導目的と保存を兼ねて整備することとなった。

3. 洞地区のハード整備状況（現地視察調査結果）

“窯垣の小径”として整備された洞町界隈の小径は、仲洞町から東洞町にかけて全長約 400m、窯垣の修繕保全・路面舗装・転落防止柵や松板・鉄板を用いた経路案内板が設置されている。小径の中間地点に位置する“窯垣資料館”は、かつて使用されていた本業窯元を復元した沿道施設で、本業ﾀｲﾙや窯道具を展示しており地元ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱによって案内・管理され、無料で一般開放されている。小径の始点に位置する資料館駐車場では現在拡張工事が実施されているなど、線的整備が行われていることが明らかになった（図-1）。

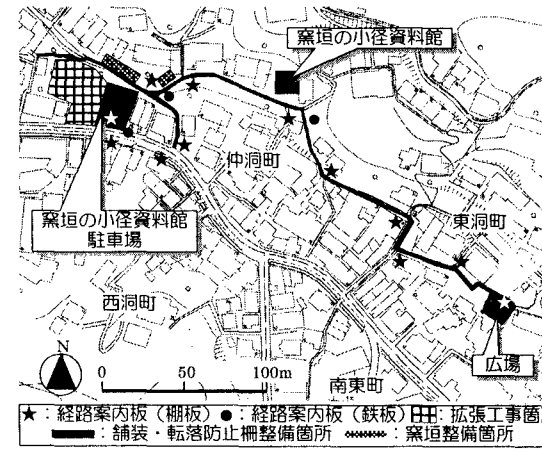

図-1. 窯垣の小径整備概要図

4. 洞地区のまちづくり経緯分析結果

窯垣の小径保全整備の経緯についてﾋｱﾘﾝｸﾞ・文献 [2] 調査の結果をﾋﾄ・ｼｶｹ・ﾓﾉ・ｺﾄの視点から事象を分析すると、以下の 7 期に分類できることが判った。

①「啓発・整備計画期」1991 年下旬～1992 年中旬

1991 年 5 月、本業窯元を中心とする地元有志により「洞町文化会」が発足した。このｸﾞﾙｰﾌﾟは、洞の良さを地元住民に改めて認識してもらうことを目的としている。協力として市職員が加わり毎月 1 回の例会を開き、地元住民への情報伝達手段として「洞町かわら版」を発行、自治会を通じて全世帯に配布した。文化会活動や空間整備の取組みについて「かわら版 1 号～5 号」で紹介した結果、市や文化会に地元住民の意見が多数寄せられ、「第一回洞町地元懇談会」(1992 年 6 月)では、計 40 名の来賓により意見交換がなされた。

②「第一次小径整備期」1992 年下旬～1993 年上旬

仲洞町界隈小径の出発地点 30m 区間の小径整備(窯

Akiko TAMAI, Takahiro HISA

垣・舗装・転落防止柵)が施行された。(かわら版6号)

③「第二次小径整備・沿道施設計画期」

1993年中旬～1994年上旬

仲洞町 70m 区間の小径整備が行われ、ｿﾌﾄ設備計画として窯財の保存活用・陶房の一般開放・ｶﾞｲﾄﾞﾏｯﾌﾟの製作が実施された。洞町整備計画ｽﾛｰｶﾞﾝ“窯垣の保存活用”“にぎわいの再生創出”を基に界隈別整備方針が策定された。「第2回洞町地元懇談会」(1993年10月)では、窯垣の小径界隈内「仮称：洞町まちかど資料館」の設置を実施する運びとなった。(かわら版8号)

④「第三次小径整備・第一次沿道施設整備期」

1994年中旬～1995年上旬

仲・東洞町 280m 区間の小径整備が行われ、洞町中心拠点施設(旧寺田家)の復元整備と駐車場整備が実施された。資料館は「窯垣の小径資料館」と命名、1995年3月に開館記念式典が行われた。文化会の呼びかけにより地元ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ(老人会 24 名)が資料館の管理・運営をする事になった。(かわら版9号・号外)

⑤「第四次小径整備期」1995年中旬～1996年上旬

仲洞町 10m 区間の小径整備が行われた。資料館開館以来8ヶ月で1万人の入場者数となり1995年11月に記念ｲﾍﾞﾝﾄが資料館・駐車場を会場に実施され“洞町やきもの祭”が行われた。訪問客の増加を契機に文化会は窯元有志に働きかけ「窯元関係者懇談会」を行い、窯元巡りﾏｯﾌﾟの作成や統一看板(松板)が設置された。(かわら版10号)

⑥「第二次沿道施設整備計画期」1997年下旬

東洞町地区小径沿道内にある空き地の再利用について、「第一回公園づくりの検討会」(1997年10月)が開催された。空地の公園化について東洞町の町内会・地元子供・文化会・市職員により公園ｲﾒｰｼﾞづくりが実施された。ｲﾒｰｼﾞの具体化を図る場として「第2回東洞町公園づくりの会」(1997年12月)が開催されたが、その後公園づくりの計画は中断、現在空地は広場として開放されている。(かわら版11号)

⑦「第三次沿道施設整備期」1998年上旬～1999年下旬

1997年以降「かわら版」の製作は一時中断し、1998年度には市が駐車場隣接地に看板を設置。1999年度には資料館駐車場拡張工事が実施されている。

5. 結論

本稿では窯業を地場産業とした地域(洞地区)におけるﾊｰﾄﾞ整備の内容を切り口として、まちづくりの経緯分析を行った。結果を整理すると以下のような特徴・効果が明らかになった。

ヒトづくり：地元住民の若手有志により町の良さを再認識する会「洞町文化会」が発足し、その協力として自治会や市職員が賛同し整備計画が実施された。

シカケづくり：「かわら版」を媒体として、地元住民へのまちづくりの意識啓発を図っている。

モノづくり：小径の整備から沿道施設整備へと発展しており、現在も整備が継続して行われている。

コトづくり：整備計画段階の要所々で懇談会を開催するなど、住民・行政・文化会の間に話し合いの場が設けられている。また記念ｲﾍﾞﾝﾄが定期的に実施されているなど、地区内外へのPR活動も行っている。

このように、まちづくりの事象を個別にみていくと上手くいっているように伺える。特に1994年度第一次沿道施設整備「窯垣の小径資料館」においては、展示史料の提供やﾎﾞﾗﾝﾃｨｱによる管理体制など、地元住民の理解と協力が内部効果として顕れており、同時に外部効果として観光客の増加も招いている。これは文化会が長年取り組んできた意識啓発運動を契機とするﾋﾄ・ｼｶｹづくりと住民の意見を尊重した市(ﾓﾉづくり)の連携が成し得た効果であると捉えられる。

しかし、この資料館整備以降1997年度の第二次沿道施設整備「東洞町公園づくり」では時間をかけて計画されているにもかかわらず中断した結果となり、「かわら版」は11号以降発行されていない。また、1999年度の第三次沿道施設整備「駐車場拡張工事」では、伝統的地域資源の保全とは相反した環境整備が実施されており、ﾋｱﾘﾝｸﾞ調査結果においても「役所の言いなりになりたくない、せめて資料館は地元で管理したい」「役所は観光開発を目指しているが、地元は意識啓発を目指している」「決められた期間内に整備資金を使用しなければならないことに矛盾を感じる」といった内容から、まちづくりが上手くいっていない現象が伺える。今回は経緯分析で留まったが、今後の課題としてまちづくにﾏｲﾅｽの現象を招く要因（問題）についてどのような点で問題が生じているのか、その因果関係を明らかにすることが必要であると考える。

<参考文献>1) 古瀬戸連区誌編纂委員会「古瀬戸洞今昔四方山話」
2) 洞町文化会「洞町かわら版」第1号～11号

<謝辞>本研究を作成にあたり、瀬戸市商工観光課の山田様、瀬戸市観光協会の井村様、瀬戸JCの皆様、洞町文化会の皆様にご親切なお力添えをいただきました。ここに深く感謝いたします。